

「戦没者の遺児 八十年を生きて」

テンゴクノオトウチャン オゲンキデスカ。

ワタシハ ゲンキデス。

（弟の名前）ハ ハリイ（わるい）コヲシテ コマリマス。

ケフ（きょう）ハ アメガフルノデ アソビニイカレマセン。

オカアチャンニ ツクッテモラッタ オニンギョウサンデ アソンデイマス。

マタ オテガミヲ カキマス。

テンゴクノ オトウチャンへ （本人の名前）ヨリ

これは、私が5歳くらいの時に書いた手紙です。

「お父ちゃんからなかなか返事が来ないね」

というのはまた書いて郵便受けにいていた、と母から聞かされてきました。

一歳の時に父が戦死しました。その時母は弟を身ごもっていました。父は昭和12年10月に日中戦争における上海方面の激戦にて江南の野に散りました。29歳でした。母は22歳でした。

【中略】

私の家の前には石碑が建立されていて、背面には戦闘状況等が刻まれています。全面に彫ってあるのは父の名前と父の弟の名前です。

父の弟は昭和15年に20歳で戦病死しました。一人また一人と息子を失った祖父と祖母の無念の思いはいかほどであったのでしょうか。

村の尋常小学校のグラウンドで父の村葬が行なわれ、次の年に弟が生まれました。以来毎月母は、弟と私を連れて、3キロ離れた山の頂上まで父の墓参りに行きました。

泣きわめく弟を背負って、その後を私がくっついて竹やぶの中の細い道を登る母の姿を鮮明に記憶しています。

それは私が国民学校へ入学するまで続きました。第二次世界大戦が終わったのは、私が国民学校4年生の時。父を恋しく偲ぶ思いは非常に強く、中学生になっても、高校生になっても山の麓まで自転車で行き、頂上の墓を訪れ、しばらく父と話をして安らいだ気持ちになったものです。

私が中学生の頃は、勉強する机の傍らには、常に父が勉強した教科書やノートを置き、時々それをめくっては「すごく難しい勉強をしたんだなあ」と関心して、刺激を受けて「よし！」と私も頑張りました。

【中略】

さて、戦争が残酷で悲惨であることは、人の命を容赦なく奪うことにあります。第二次世界大戦の終結をみるまでには、戦争に翻弄された多くの犠牲がありました。遺された国民のほとんどが犠牲の辛酸をなめました。

戦争の遺産を背負い喘ぎながらも社会の担い手として力強く生きてこられました。しかし戦没者の遺族は高齢化し激減しています。

子どもたちに、命を大切にする正しい教育がなされて、健全な社会が樹立されること願って、やむにやまれぬ思いです。

父は80年の間無言で教育をしてくれました。無言の力は実に大きいものでした。母は弟と私を手塩にかけて育ててくれました。

私は更生保護のボランティアにいのちをもやす現在も遺児は遺児のままです。

戦争は絶対にしてはなりません。